

才能と好奇心

文 / 山下太郎

世間では一般に、才能があるとかないとか口にする。だが、才能は誰にでもあると思われる。そして才能には無限の種類がある。英語では、才能のことを gift と ability ともいうが、天から与えられた「贈り物」は、何かを行う「可能性」として各自に備わっている。エマソンは「才能は天から与えられた使命だ」と喝破した。

したがって「私には才能がない」という言葉は、英語に直せば「私には何もする可能性が与えられていない」と口にするのに等しい。問題は、才能の有無ではなく、それをどれだけ磨き上げるかということである。ゲーテも「天才とは努力する才能である」と述べている。

繰り返すが、人間には無限の才能が与えられている。もし、特定の才能をできるだけ短期間に伸ばすことが教育の目的であると信じられたなら、その結果、伸びきったゴムのような生徒が増えるのは当然である。一本のゴムを無理に伸ばせばすぐに切れるが、3本、4本とたばねていけば、容易に切れるものではない。「好奇心」(英語だと curiosity)とは、このように多くの種類のゴムを伸ばす力をさすといつてもよいかもしれない。

伸ばしたゴムの「長さ」だけを問題にするのなら、特定の一本のゴムに注目し、それを伸ばした方が、早くしかも長く伸ばすことは容易に出来るだろう。一方、複数のゴムを同時に伸ばそうとすれば、引っ張る力はたいへん大きなものとなる。

では、人間は、この抵抗感を苦痛と感ずるのか、喜びと感ずるのか。ここが運命の分かれ目である。筋肉トレーニングに励む人がそうであるように、人間は徐々に負荷を高めることに喜びを見出すことも可能である。ギリシアの詩人ヘシオドスは、「神は幸福の前に汗を置いた」と述べている。教育とは、この知的筋力、すなわち「好奇心」に刺激を与え、活性化させることを目的とするものであり、その結果得られるものは、弾力のあるしなやかな知性ということになる。

ところで、ローマの詩人ホラーティウスは、偉大な詩人に必要なのは、才能か努力かと自問し、「ともに必要」と答えている。簡単に言えば、才能のない人間はいくら努力しても無駄という意味にもとれる。たしかにそうかもしれない。だが、このことを私の「ゴムひも理論」に照らすなら、伸ばすべき才能の数は無数にあるのだから、「一つ」が駄目でも簡単にあきらめるな、となる。

ここで冒頭のエマソンの言葉に戻ろう。「天から与えられた使命」とは、英語で言えば mission (ミッション) のことである。比喩的に言えば、天に口があって「おまえはこう生きよ」と命令している様子を想像することが出来る。自分を見つめ、その声が聞こえるかどうかポイントとなる。

そう考えれば、才能とは、うわべの特徴(学校の成績や身体能力など)に関わるというより、人間の生き方に深く関わる言葉と考えたほうがよさそうである。事実、エマソンの言葉はこう続く、「自分に対していっさいの空間が開かれるような方向がひとつはあるものだ」と。才能を伸ばすとは、エマソンにいわせれば、自分の生きる道を深く問い直すことと別のことではなかった。

(文責 山下太郎)

「しぜん」

担当 山下育子・山下太郎

しぜんだより

夏休みが明け、しぜんクラスの子もたちの笑顔が集まったのは9月11日。陽に焼けさらに成長した様子は、まず時間をかけて行った「しぜん日記」の発表からもうかがうことができました。

野菜や草花を育てた記録、家族旅行の思い出、キャンプ、海、バーベキュー、毎日川で遊んだこと、いろんなセミを捕まえたこと、松上げを見たこと等々、たくさん書いた中から自分のとっておきの数枚を選んで順に発表しました。しぜん日記は、子どもたち自身の体験や驚き、感動の一こまを書き留めておいて、クラスで発表することでお互いが同じ思いを共有できたり、仲間から質問があればそれに応えるやりとりなどが楽しいです。子どもたちは、しぜん日記のフォーマット内に20～40字くらい書くこともあれば、150字ほど目一杯つめて書いていることもあります。また不思議に仲間と内容が重なることがありますが、それもまた楽しく、同じ時季の自然に気づきつつもそれぞれの目線の違いに興味深く耳を傾ける様子もあります。無理なく続けていきましょう。

9月のあるクラス テーマ “フォレストーズの活動 熊手で基地の手入れをする”



鉛筆を出して、フォレストーズの取りくみのプリントを見てみましょう



5つめの欄に、今日使う道具を書きこみます。一番最後の活動日記は、森から帰ったら書いてみよう。



熊手を手に、グループに別れ森へ出発！



いつもの道を進みます



うわっ、白い大きなきのこだ！



基地に到着後、早速落ち葉集め開始。柄が長いから、ゆっくりとひっかからないように。みんな一生懸命です。



あれ？これ何だろう？



よし！きれいになった



最後は木登りだ



3人でそれっ！



教室に戻り記録をつける



いま、書いてしまおう



なんて書かなかあ？



みんなはやく…

太陽の陽はまだ長く、森から園庭の方向に戻ってきた途端、西の空は大きな夕陽であたりは一面オレンジ色に染まっていた。この日は余裕を持って教室に戻り、早速、鉛筆でさらさらと活動日記を書き込む姿がありました。入学したばかりの春はゆっくり一字一字進みましたが、秋にもなると本当に鉛筆を持つ姿が板についてきました。

10月のあるクラス テーマ “フォレストーズの活動 森の恵みをいただく お山の栗で、“焼き栗”をつくろう！”

植物の花が咲いたあとは、秋になればいろいろな実がなります。では、味覚狩りにはどんなものがあるかな？「柿狩り」「キノコ狩り」「ブドウ狩り」「栗ひろい」「みかん狩り」「りんご狩り」など、たくさん発言がありました。

それでは今日は、お山にたわわと実った栗がいっぱい落ちてるところを見つけましょう。そしてその栗で「焼き栗」を作ってみよう。早速、3グループに分かれて始めます。



軍手をしたら準備OK!



ザルを手に出発!



大きな実が落ちていたよ



うわあ、きれいな栗!



ほら、うまく取れたよ



見て見て、大きな栗の実



上手くいがから外せたよ



いっぱい、収穫できたよ!



水でさっと洗って



熱湯で2~3分浸し殻を柔らかく



ぼくのお手製の“竹コップ”



さあ、いよいよ点火!



こちらのチームも点火



火加減を調節する



切り目から口が開いてきたよ



どのグループも真剣



この調子、うまく焼けそう



う~ん、焼き栗のにおいだ



トングや割り箸をつかって裏返してまた焼こう





さあ、そろそろかな？



竹で割って作った竹皿に



アツアツに焼けた栗を竹皿にのせてピースピース！



こっちも出来上がり！



自分で作った竹コップで飲むお茶は美味しいわ



う～ん、なかなかいけるなあ！



暫くしたら栗の皮をむいて



『んっ？』



お口いっぱい頬ばったよ



『うん、美味しいのもある...微妙...』

この日は、教室で予めプリントで段取りを確認後、外での活動となりました。大きな栗のいがを丸ごと持ってみたり、上級生が靴をうまく使って中の栗を取り出す方法をみんなに教えてあげるシーンもありました。自分たちで収穫した栗をお料理する過程は、わくわく楽しく、また、それぞれお手製の竹コップで飲むお茶も、本当に美味しそうでした。今回は、クラス終了の時間がせまり、栗の焼き具合が今ひとつ足らなかったために、甘く出来上がった焼き栗もあれば、残念なことにまだ苦みの残った栗もありました。後日、活動を振り返った子どもたちの感想には、「みんなで手作りの焼き栗は最高に美味しかったです。」「栗がいっぱいひろえて嬉しかった。」などがあり、秋の思い出の一コマになったようでほっとしました。また、自然の恵みをいただく美味しい体験がみんなですればと思います。

森の実りの一つ、栗は、秋10月にいがが割れて2～3個入った実が落ち、実は栄養が多くお菓子づくりにも欠かせない材料になる。木は高さ10～25mに育つ落葉樹で、木は湿気に強く腐りにくいために建築材、家具、鉄道の枕木などに使われる。栗やドングリなどの実は、縄文時代から大切な主食。しぶくない木の実には、シイ、イチイガシ、マテバシイ、シリブカガシ、松の実、クルミなどがある。あくぬきしないと食べられない実の、クヌギ、カシワ、コナラ、カシ、ミズナラ、トチの実なども、土器を使ってしぶみを抜く方法が発明されてからは縄文人も食べるようになる。どングりもちやドングリクッキーを作ってみたら、結構美味しいかも！

10月のあるクラス テーマ “食べられるドングリって？ 森に食料は落ちている？”

前週に子どもたちの「しぜん日記」を預かり楽しく読ませてもらった後、絵や文章にコメントを書き込んだものをみんなに返すところから始めました。今までにない興味深いことに、偶然同じテーマが2人ずつ3つのテーマがありました。

それは、 ザリガニについて オジギソウについて 天体望遠鏡で観察したことについて でした。

ザリガニをテーマにした日記の一つは、滋賀県のいとこの家の前の川で、赤くて大きいザリガニと茶色くて小さなザリガニの二匹がつれたこと、二つ目は、琵琶湖博物館に行ってお昼ごはんを食べた後、ザリガニつりをしてザリガニがとても元気づけて驚いたことでした。どちらも、赤オレンジ色の生き生きとしたザリガニの絵が描いてありました。発表後、ザリガニってどうしたら釣れるの？ という話題になりました。オジギソウについては、一つ目は、お庭のオジギソウのピンクの花が咲いたこと、二つ目は、葉に触れて閉じる様子をよく観察して書いていきました。オジギソウの花の写真もみんなに見せてくれました。最後に、天体望遠鏡での観察について、ここにご紹介しますと、

<平成19年9月25日 はれ> 1年生

『きょう、ぼうえんきょうでおつきさまをみました。じゅうごやのまんげつをみました。クレーターもみました。おつきさまのなかで、うさぎがもちつきをしているところもみえました。それにつきみだんごもたべました。』(日記下欄には、大きな望遠鏡で月を見ている自分自身も描いてあります)

<平成19年7月30日 はれ> 3年生

『久しぶりに天体ぼうえんきょうで木星と月を見ました。月はおぼろ月で、木星はしまもようは見えずぼんやりと見えました。』(下欄には、木星と月の絵を描き、色鉛筆で色づけがありました)

またこの日、新聞の切り抜きを貼って、絶滅危機が心配されている「インドネシアのゾウ」についての発表もありました。

今手元には、「学校帰りの不思議なこと、家の庭にいっぱいいたチョウの幼虫のこと、植物園で見つけたカヤの実のこと、なぜアゲハの幼虫がはじめ鳥のフンのような色をしているのか、学校の遠足で比叡山にのぼったこと、小浜の船着き場でいろんな魚が釣れたこと、つばきの実が三つでなく四つに割れているのをはじめて見つけたこと」など、さまざまなテーマで書かれた日記が集まっています。子どもたちは、みんなの前で発表することにも随分慣れてきました。



次に、日本には約20種類ほどがあり、昔の人は主食にしていた「食べられるドングリ」について考えました。たくさんあるカシやシイの実を総称してドングリと呼びますが、よくあるドングリとは少し違った独特な殻斗(かくと=ぼうし)と実の形をしている「スダジイ」を配り観察してみました。シイの種類のスダシイも、フライパンで煎って、またはそのままでも食べられる木の実の一つです。殻を歯でかじって中の実を試してみたところ、『美味しい!』『この前の栗より甘いよ!』と、食べられることも確かめられました。



小さなスダジイ

かわいい実、二つゲット

奥歯でかじってみよう

この殻はたべられないな

その後は、実際に森に入ってどんな種類の木の实が落ちているかを見つけに行くことにしました。キノコもありましたがこの時は目にはとまらず、木の实さがしに夢中になりました。



袋の中に1枚ずつ入れた、「どんぐりのなかま一覧」と見比べながら、ちょうどみんなの基地の奥に山ほど落ちていた「マテバシイ」と思われる実を袋いっぱい集めました。落ち葉をかきわけていくと、辺り一面に、面白いほど落ちています。「食料食料!」と言いつつどんぐり拾いに熱中する様子は、楽しそうで、また、とてもたくましく思えました。

(文責・山下育子)

小学生・ことばの部

「ことば1年生」・「ことば2年生」 担当 山下太郎

小学校低学年のクラスでは、幼稚園時代に学んだ俳句をすらすら筆写できるように、また、何も見ずに全員の前で暗唱できるように練習しています。秋学期は全部で10の俳句を学びました。同じことを繰り返していると、覚えることが苦ではなくなってきました。これが自信につながります。たとえば、A,B,C と学んだ次に D の俳句を学ぶとします。D を学ぶ前に A~C を一度おさらいし、その後で D の習得に取り組むのがコツです。D を繰り返し練習した後、今度は A~D の全体を通して暗唱するのです。次の週は、A~D を復習した後、E を付け加えるわけです。この学習法は後々役に立ちます（特に語学の勉強）。このような芯になる勉強を押さえたら、後の時間は作文を書いてもらったり、お楽しみの紙芝居を読んだりします。ある日、とてもよいお天気だったので、山の奥へ秋を探しに出かけました。ノートと鉛筆は持って行ったので、道々俳句をつくって歩きました。その日は夕日がとても美しく、私たちにとって心に残る経験になりました。「ことば」を学ぶ上で一番大事なのは日常の「生きた経験」にほかなりません。時にメリハリをつけながら、楽しく有意義に学べるよう工夫しています。

（文責 山下太郎）

「ことば」3年生 担当 福西亮馬

俳句の暗唱からはじまり、300字ほどの文章の朗読と書き取り、辞書の練習などをしていきます。

俳句では、「秋風のふけども青し栗のいが」や「みのむしの得たりかしこし初時雨」（ともに蕪村）など、秋から冬にかけての十句を紹介しました。節目に、チームに分かれて黑板での書き取り（生徒たちはそれを「対決」と呼んでいます）をしています。

朗読と書き取りでは、『日本の昔話』（柳田国男）にある、ごく短い話を選んで取り組んでいます。段落や句読点など、まだまだ我流ではありますが、全体的に「見て写す」という姿勢が少しずつ身についてきているように思います。一字でも読み間違ったり、書き間違ったりすると、一から読み直し（書き直し）というルールなので、一回で合格することは難しいです。これは私自身の小学校時代の思い出でもあります。また生徒から出てきた案で、書き取りでは習っていない漢字を書いた分、間違ったところと相殺できるというルールにもしています。中にはプラス何点で合格できるかを目標にして「目が漢字」になっている生徒もいたり、さまざまです。

辞書の取り組みでは、実際引くときに必要になることを見ています。たとえば五十音の定着や、もとの文に「食べて」とある時は、「食べる」として辞書を引くといった点です。「食べない」の時は、「食べる」で引いてからあとで意味を否定するということ、ちょっと難しかったりします。

授業の最後には、紙芝居を読むこともあります。紙芝居と言うと、決まって一番前に座りに来る生徒もいたり、ことばには色々な励まし方があるように思います。

さて、秋の最初の授業では、夏休みの思い出を作文にしてもらいました。「作文」と聞くとみんな「ええー？」という反応をします。私自身もかつてそうでした。紙に向かうことは、自分とも向き合わねばならないので、大変プレッシャーを感じる作業です。自信が要ります。以前うまく書けた記憶があれば、後押しされて書き始められるのですが、その反対の記憶の方が強いと（ほとんどの小学生は）しり込みしてしまうものです。

けれども、がんばって書いてくれたことの伝わる文章の中には、必ず一つ以上のよい表現が見つかります。漢字で一生懸命書いたことも称揚の対象になります。そのほめるべきものをほめてあげれば、それがまた「書いてみようかな」という次の気持ちを後押しします。

今回の作文の中に、「ろてんぶろは、青空がとても気持ちよかったです」という一文がありました。私は、ろてんぶろ「は」と、青空「が」という表現に、露天風呂と青空とがともに作者の心に同じ大きさで映っていて、味わい深い詩のように感じました。もしこの表現を直してしまえば、最初にあったものが壊れてしまうだろうと思いました。その生徒が、この調子でぜひこれからも書き続けてくれるようにと願います。

最初からまとまった量の文章を書くことができる人はまずいません。色々な経験をし、書きたいという内容を持ち、一方ではさまざまな文章を読み、自分のこれまで言い表さなかったことと符合することに感動したり、自然と文章を盗んだりしていくことが最初です。そして書いたものを誰かにほめられ、自分でも書けたという実感が湧き、それが楽しみとなることで、徐々に内側から育っていくのだらうと思います。

これからも折を見て励ましていきたいと考えています。

(文責 福西亮馬)

『お父さんのはも料理』

三年生 S・U 君

ぼくは、夏休みの終わりごろ、お父さんのはも料理を食べました。

まず、初めに出た料理は、はものおさしみが出ました。次にはもの落としが出て、メインにはもしゃぶがたっぷり出ました。

はも料理は、京都の夏の代表料理です。夏になると、お父さんははもをさばいて料理をしています。

ぼくは、時々、仕込みを見えています。一匹のはもが、みるみるうちに、開かれていきます。

そして、一番たいへんな骨切りです。

骨切りしている時は、「シャツ、シャツ、シャツ。」と骨が切れている音が気持ちいいです。

こうやってお父さんが、一生懸命がんばっているのは、はもが色々な料理に変身していきます。ぼくは「すごいなあ。」と思います。

ぼくは、時々、お父さんのはも料理を食べることができて、とてもしあわせです。

(二 七年・九月)

寒さが身にしみる季節になってまいりましたが、このクラスでは新しい仲間を迎えますますます元気にわいわい言いながら課題に取り組んでいます。

春学期は『星の王子さま』を読み進めていたのですが、内容が難しく入り込みづらかったかなという感想を前号でお伝えしました。そうした反省のもとに、今学期は短めの文章で、なおかつすぐに興味を引くであろう自然科学の謎に答えるという本を選びました。題名はそのまま『理科のなぞ』（佐々木昭弘著）です。その本では、たとえば「宇宙人っていないの?」、「心臓は何回ドキドキするの?」、「マイナス 196 の世界」といった疑問に対して、見開き 1 ページで簡潔に答えられています。こちらの思惑通りに興味を持って読んでくれて、内容もおよそ理解できていました。「焼きそばを作るときに、ムラサキキャベツを入れると緑色になり、カレー粉を加えると赤くなり、どちらの場合もマスターソースをかけると元の黄色に戻る」という話を読んで、早速家で実験をしてくれた生徒もいました。もちろん眼目は「ことば」にあるわけですが、理科への興味が深まっても悪いことはないでしょう。

今度は逆に、この本のように身近な疑問に対して答えるような文章が書けるのだろうかということを試してみました。最終的な目標はむしろこちらのほうです。たとえ直接言葉を扱う文学者にならなくても、研究発表、会議の報告、私的な手紙などで文章を書く機会は数多くあることでしょう。「理系だから国語は嫌い」といった発言をよく耳にしますが、物事を調べたり、調べたことを発表したりするときにはどうしても言葉が介在してしまいます。このクラスではかなり実践的に、自分の抱いている疑問を何も条件をつけずに思いつくまま出してもらいました。「シャープペンシルは誰が発明したの?」という身近なものから、「恐竜の始まりと終わりはどうであったか?」という科学で争点となっているもの、そして「人間はどのようにして誕生したか?」という壮大なものまでありました。一から調べてもらうのは大変で時間もかかるので、こちらのほうで百科事典やインターネットなどから資料を用意してきました。読んで理解するのに一苦労、それを文字にするのにまた一苦労です。大人にとっても困難な課題ですので、相当心細かったに違いありません。それでも形にできたら自信につながると思います。余裕があればインターネットの情報と紙媒体の情報との違いなどにも注目してもらえればと思っておりました。

漢字に関しては、春学期から引き続き漢字検定を活用しています。過去問を繰り返し解いていくと同じ漢字が何度も登場するので、着実にできるようになってきました。8 級（小学 3 年生までに習う漢字）の問題を 1 冊全てやり終えて次はどうしようかと考えていた際に、もう一度最初から同じ問題をすると言われたときは感心しました。繰り返すことができるようになるのがきつとうれしかったのでしょうか。7 級（小学 4 年生までに習う漢字）では音読みと訓読みの違いを問われます。そこから、漢字には音を表す部分と意味を表す部分があるということに、少しずつ気づき始めているようです。

そして最終的には文章を読むことと漢字の学習とがうまく噛み合えば言うことなします。漢字が読めないと文章の意味がわかりませんし、下手をすると辞書を引くことすらできません。自分で文章を書くときには問題がないかということ決してそうではなく、簡単な漢字で書ける言葉がひらがなのままだと説得力が大きく減ってしまい、最悪の場合は読者が読むことを止めてしまうかもしれません。このクラスでは素材を変えながらも基本的な読み書きを繰り返していきたいです。

（文責 浅野直樹）

艦舵なき船の船出

そして、もう一度あの頃の自分に戻れないか、とも思ったのです。つまり、目の前からスーッとこれまでの地図が消え、磁石も羅針盤も見つからず、とにかく船だけは出さなければというあの頃の突き動かされるような熱い想いです。そしてたどり着くべき港さえわからない新しい旅です。もしかすると、誰の人生もさまざまな意味でそういうことなのかもしれませんね。

(星野道夫「新しい旅」『旅をする木』文春文庫、1999年、16頁)

秋学期の授業で上の箇所を読んだとき、自分は次の一文がすぐに思い浮かびました。

その翌日、良沢が宅に集まり、前日のことを語り合ひ、先づ、かのターヘル・アナトミアの書にうち向ひしに、誠に艦舵なき船の大海に乗り出だせしが如く、茫洋として寄るべきかたなく、たゞあきれにあきれて居たるまでなり。

何か新しい大きなことに挑戦しようとするのを、大海原への船出に喩えることはよくあることです。しかし、この一文は、そのようなありきたりの印象で言い尽くされない、生々しい実感がこもった一文です。

江戸時代の医学者杉田玄白は、前野良沢・中川淳庵と三人で、オランダの医学書ターヘル・アナトミアの全訳を思い立ち、個々の単語のひとつひとつの意味を確定することから始め、適切な訳語を思いついたときの「連城の玉をも得」たような嬉しさを糧に、足掛け四年をかけてようやく全部を訳し終えたことをのちに回顧して『蘭学事始』としてまとめました。これは『恩讐の彼方に』で知られる菊池寛が小説にしています。上掲の一文は、これに続く「フルヘッヘンド」を解釈するエピソードとともに、『蘭学事始』中で最も有名な箇所であり、学問に対する真摯な姿勢を改めて思い起こさせるものです。

秋学期は、小学生クラス・中学生クラスともに、それぞれ5級と3級の漢字検定の問題集を一冊終えて、いっそうの定着を図るために復習を始めています。春学期に問題集の第一回目を配布したとき、特に初めて取り組む生徒は、これを全部覚えなければならないのか...という「茫洋」とした思いにとらわれたかもしれません。同じように、作文についても何をどう書いたらよいのかわからず、「寄るべきかた」ない気持ちになったかもしれません。しかし、漢字は復習段階に入ってからそのような思いは消え、作文は未だ意到らずともいくらかの手応えを得て、いずれも取るべき指針が見え始めてきた時期なのではないでしょうか。

漢字の定着は書くことが第一です。特に誰もが一度は苦戦する書き取りの問題は、何度も書いて練習することが記憶の定着にとって大きな効果があります。書き取りの練習をするときは、出来るだけ大きくはっきりと書くようにするのがコツです。鉛筆を何本使ったとか、ノートを何冊使ったとか、「これだけ勉強した」というのが自分で分かるような工夫をすると、長く続ける動機付けになるかも知れません。

また、作文は、学習記録表にその日の出来事や学んだこと、感じたことを忘れないうちに書き留めることを大切にしてください。毎日の日記をつける習慣から、自然と発見的な視点を養うことが出来るようになるでしょう。その発見的なまなざしを、授業で読むテキストに向けてください。今年のテキストで多用されている比喻が一体何を例えているのかを理解することは、やがて実際に文章を綴るとき表現の豊かさにつながっていくことと思います。

冬学期もがんばりましょう。

(文責 南雲泰輔)

小学生・かずの部

「かず」 1～3年生 担当 下村麻紀子 / 福西亮馬

このクラスでは、小学校1～3年生の10名の生徒と一緒に勉強しています。現在は小学校3年生と1、2年生で教室を分けて実施していますが授業が始まる前後は学年というものが関係なくみんなで話している姿が見られます。また、亮馬先生と時間交代でどちらの教室にも顔を出して子供たちをみています。

授業では、1人1人の学習到達度に合わせて自分でドリルを選び、解いてもらっています。わからないところがあると、その箇所を放置するのではなく「先生、わかりません!!」と元気に手を挙げてくれます。そこで先生が他の子どもを教えていて「次の問題を解いて待っていてね」と声をかけると、その通りに待っていてくれます。わからないところがわかるようになったときに「じゃあ先生こういうこと?」と笑顔で言ってくれる顔が、かずのクラスで一番魅力的な笑顔になっていると感ずます。

1人1人できるところもできないところも全然違います。また、学ぶことに対する意欲が向く先もまったく異なっています。ただ計算問題を解くことだけが、勉強なのではなく、何かをじっと考えるということを身に付けられるように亮馬先生が迷路を用意してくださったり、1人1人に合わせた問題を作成してくださったりしています。

またドリルについても1ページできたら1つマスを塗ることができる達成表があることで自分がここまでできたと子供自身の目で確かめ、実感できることで「次へ!!」の意欲が増すことにもなります。

何か知識を得て、問題が解けるということは勉強であったとしても学びではないと思います。「知りたい!」「これしたい!」と子ども自身の探究心や好奇心を育てることが、まだ成長段階にある子どもに対してできるだと思います。何かを考える力を子ども自身で身に付けていくことで大人の予期せぬところで自ずと成長していけるのではないかな、と私自身が大学で福祉を勉強していることから感ずみます。

(文責 下村麻紀子)

1年生は、6月ぐらいから始まったドリルの取り組みも、いよいよ8冊目にさしかかりました。目に見えるところではそうですが、本来は「今が何冊目」であっていいです。金子みすずの「みんなちがってみんないい」です。

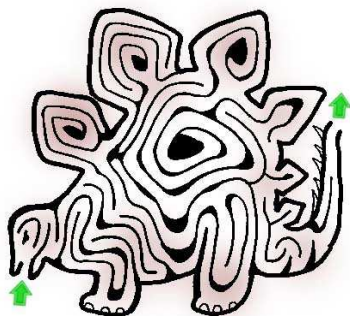
それぞれにとって今日の前に同じ高さの段があります。それを単に何をしているかという次元で見れば技術の話になりますが、誰がそれをしているかの「誰が」という次元で見れば、自分と何かとの思い出になります。それは一人一人にとって意味のあるものなので、他者とは本来較べられないものです。

ある時、授業が終って帰る途中に、「うふふ、ぼく、あと2さつで、10さつになる」と言い残した1年生がいることを思い出します。そのとき、こうしたかわりが、その生徒にとって何らかの思い出をかたちづくってくれるようにと思い、また私自身を、その生徒の可能性を小さな窓口から覗いている者にすぎないのだと感じたのでした。

またある生徒とは、ドリルを半分こえたところから、どうしても本人の嫌なページがあって、なかなか進まないことがありました。前からではなく後ろから解こうとするので、「あと何ページ」かを見失わないように、1ページできたら塗れるようなマス目を作ったりしました。それでもなかなか進みませんでした。とうとう「これ置いといて、他のドリルにする?」と聞こうかと思った矢先、不意

にその生徒が「ここ、宿題でやってくる」と宣言し、それからというもの、1ページ1ページがとうとう最後の1ページになってやり遂げたのでした。こうしたこともあって、やはり生徒の可能性を、こちら目だけで判断できるものではないのだと感じました。

さて、最近他に取り組んでいるものに、迷路があります。私自身の思い出では、やらなければいけない算数はそこそこでも、やらなくてもいい迷路は好きでした。特に壁新聞のコーナーにそれを作るのが好きでした。今思えば、迷路やそれに似た「考える遊び」のおかげで、多分、算数を最後まで苦手にならなかったのではないかと(何か保険が働いていたのではないかと)感じます。



迷路だったら、他のパズルと違って「これが分かるようになってから」という条件がなく（「スタートからゴールへ」というおなじみのルールなので）すぐにでも始められます。ちなみに、迷路とはいえ、ある程度の先読みと、選択肢の記憶と、集中力がとがいます。そして、「考える」ということを絵の中で実地に楽しんでいる意味もあります。

最初は、学校で45分授業に慣れてきたばかりの1年生のために用意したものであったのですが、跡から2年生にも3年生にも人気がありました。息抜きといいながら、実は集中してもらっているので、迷路はいい教材です。

一方、3年生になると、億単位の数を、漢字から数字に、数字から漢字に直すことや、長さや時間の計算、棒グラフ、余りのある割り算といった関門が出てきます。そこで、それまでの自信が足りないと、その説明に対して「むずかしい」という言葉がつい出てしまうケースに陥るようです。

新しいことを習ってすぐにそれを吸収することは大事なことです。もし「そこ」を丁寧に教えてもうまくいかない場合は、過去の自信の蓄積に問題のあるケースが多いようです。自信がないと、考えることがそこでストップしてしまうからです。せっかくのエンジンもガソリンがなければ動きません。もし「5?6?」とあてずっぽうな答を返す場合があるとすれば、その時です。それで叱ってしまうと、苦手の種を蒔いてしまうこととなります。3年生のうち「そこ」を後回しにして前の学年のことをしていても、まだまだ追いつきます。なにより、本人が算数という世界で「自分ではできる」という体験をし、自信をつけてもらうことが先決です。

これは私なりに感じる大体の目安ですが、各学年のドリルで、計算と文章題を「5冊ずつ」するのがよいと思われます。もし3年生で、1・2年のドリルを3冊ずつしたことのある生徒であれば、あと2冊ずつすれば十分でしょう。新しいドリルを買わなくても、同じものを繰り返しすればほぼ1冊分と同じ効果があります（特に自信の上で意味があります）。もし学校のドリルを一通りただけで学年を上がってしまっている場合は、その2回目からすることをお勧めします（ただし本人に上手にその気になってもらわなければなりません）。

過去にしていたことを今することには、積極的な意味があります。できなかったことができるようになる意味と、昔やっとの思いでできていたものがいつの間にか普通にできるようになっていることを確認する意味とです。いずれに転んでも、以前の自分と違うことを発見でき、自信を蓄えることができます。それをもって、次の課題に当たることができます。

また煮詰まった時には、ふと目先を変えることも必要です。「孔子珠をうがつ」ではないですが…。たとえば、パズルで考えること自体を楽しむといいと思います。時には算数のもとにもある「考えること」に苦手意識がかからないように応援できたらと思っています。

（文責 福西亮馬）

「かず」2～5年生

担当 福西亮馬

この秋学期に新しくできたクラスです。どの生徒も1年生、2年生のドリルから解き直しています。これが意外なことに「私は結構できる」という自信がついて面白いようです。「当時してほしかったこと」をそのままにせず、たっぴりと蓄積してもらうことを、このクラスでは目的にしています。その蓄積への自信が、今後も算数の苦手意識を克服する（予防する）第一の方策だろうと思います。

「1年生なんて」と思う生徒でも、では1年生の文章題は？ となると、やはり埋めるところが出てくるものです。そこを埋めてから「これでもう心配はない」という人に、今度は2年生のドリル（今度は計算の方）を渡しています。その際むしろ「もう1回1年生のところやりたい」と前の学年の方に人気があります。それでいいと私は考えています。飽きるまでやっておいて、自分からその先を言ってくるのを待った方が、新しいことへの頑張りが違うからです。

また今できるということを確認することは、次に進む上で大事な力の源になります。「負ける気がしない」という自信があれば、次にどんな問題にぶつかっても「きっとできるはずだからやってみよう」とか「先生は難しいからやめときと言っていたけれど、できたらきっとすごいぞ」と思えるようになります。

一方で、今解き終えたドリルは、どうかお家の方でも、その生徒が中学生・高校生になって、自分を一度振り返るようになるまで、保存していただければ幸いです。ドリルの書き込みから、当時の自分のしぐさや面影を見つけたならば、おそらくその時も勉強で詰まっていたら、その先へ進む

ための何らかの励ましを得られるのではないかと思います。保存されたものを見ることは、たった一度でも効果があります。かつて五百円だったドリルが、過去の書き込みによって、その生徒にとっての価値を増す時まで、どうかそれまでの間、置いておいて下さいますよう、よろしくお願ひいたします。

(文責 福西亮馬)

「かず」4～6年生

担当 福西亮馬

このクラスでは、ドリル1ページを0.5万石(戦国時代の換算で1万石=250人とその家族が1年間食べていける分の米の量です)と決めて、国盗り物語をしています。尾張57万石、駿河15万石、遠江26万石、三河29万石……といったふうに、それぞれの地図に自分の領地を広げています。むかし武田信玄が150万石ぐらいの大名でしたから、すでにみんなはそれを通り越した大名になっています。

また、ドリルできりのついた人から、論理パズルをしています。かけ算や割り算を一通り習ったので、できる種類も増えてきました。みんなパズルは大好きなようです。論理的な楽しさと、感覚的な楽しさとがごちゃになっているところもありますが、そうした「わけの分からない、けれども勝てる」という勝ちぐせもまた、計算のように答がある程度予想できるものとバランスさせて取り組むことは、あとあと大事になるだろうと直感します。「パズルの中に算数あり。算数の中にパズルあり」です。ある意味、計算が少し苦手だなと思っていた生徒でも、「これなら」と思って算数本来の楽しみであるはずの「考えることの楽しさ」を見つけてもらえたら嬉しいと思います。

	3	6	1
			5
	3		

1 たしざんパズル

- ・たて、よこ、どの列にも「1、2、3」を1つずつ入れます(3、1、2など)
- ・また肩の数字は太線で区分けされたマスの和を表しています。

				4
			2	
4	3	4		
				4
4				

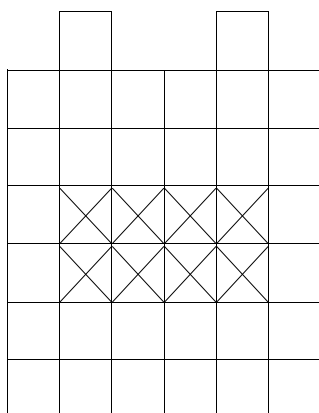
2 箱詰めパズル(かけ算)

- ・数字が書かれたマスを、その数と同じマスを持つ長方形で囲ってください。
- ・すまなく埋められたらクリアです。

	3		

3 屋根の見えるパズル(難)

- ・マスには1、2、3階建ての家が建ちます。
- ・たて、よこどの列にも「1、2、3」階建てが一軒ずつ建ちます。
- ・の数字は、その方向から見える家の「屋根」の数を表しています。



4 ナイトの周遊問題

- ・ がスタート、 がゴールです。
- ・チェスのナイトの動きで、ゴールにぴったりとたどりつけてください。
- ・×は池ポチャゾーンで、一度落ちるとゲームオーバーです。

5 間違いさがし

(正しい)



(まちがい) 3つあります。



(文責 福西亮馬)

中学生・高校生の部

「英語」

中1・英語の基本
中2・英語の基本
中3・英語の基本

担当 山下太郎

中学生のクラスでは、基本的な英作文のドリルを解いてもらっています。このドリルは私のオリジナルで、ちょっとした工夫をこらしています。素材は教科書や問題集などに出てくる英文の日本語訳で、エクセルファイルにデータとしてため込んであります。ボタン一つで学年・学期毎に問題がランダムに抽出され、自動的にプリントアウトされる仕組みです。同じプリントができあがる確率はゼロに近いわけです。隣の生徒と異なる「自分だけの問題」がいつも用意されるわけですから、マイペースでじっくり問題に向き合うことができます。自信のない場合は、辞書を調べたり、過去のプリントを参考にして解答を出してもよいことにしています。要は、「他人」でなく「過去の自分」との「対比」によって向上する心を持ってもらいたい、と思っています。

私が授業中に一番気をつけているのは、採点の仕方です。生徒は「はい、できました」とプリントを提出します。全体で8割以上できている生徒の答案なら、一々丸をつけず、間違っている問題番号に印をつけるだけにします。時間に余裕のあるときは、「全部で二カ所間違っています」とだけ伝えることもあります（ちょっと意地悪ですが）。中学3年生（実は高校生も大学生も同じ）が中学1年レベルの問題を解く場合、しばしば「ええっ？（全部できているはずなのに～！）」というリアクションを見せることがあります。しかし、綴りであれ、単数・複数の間違いであれ、冠詞の付け忘れであれ、間違いは間違いです。驚きのリアクションを見るのはちょっとした私の楽しみです。というのも、自分で自分の「凡ミス」に気づいた生徒の表情には、「なるほど！」と腹から納得した表情が見られるからです。私の基本的考えとしては「自分で自分のミスに気づく力」を養ってほしいので、実力がどのレベルであれ、各自にとって「これくらいできて当たり前」と思いこんでいるレベルに焦点を合わせて問題を解くようにしてもらっています。

（文責 山下太郎）

「英語」

高校・英語の基本

担当 下村麻紀子

このクラスは現在生徒1人で、マンツーマンで行っています。そのため苦手な箇所をとことん一緒にやる、という形をとっています。

現在は英文法が主な内容となっていますが、ただ文法問題をひたすら解いていくのではなく、出会った問題から得られるものをすべて身につけてしまおう、との思いからすべての問題を和訳もし、知らない単語もすべて調べてもらっています。そのときには忘れてしまっても、一度触れたことがあると二度目、三度目にはもっと覚えて記憶に残りやすくなります。

英語、と聞くと苦手な意識がある子も多いですが、日本における Japanese が国語であるように英語圏においての English はその国の国語で、英語圏の国の文化を知ることにもつながります。以前、一緒に解いていた問題集にNYの暮らしやすさについての会話文がありました。NYは他の都市と違って、いろいろなお店が夜遅くまで、あるいは日曜にまで開いているから暮らしやすい、との内容でした。この問題の空白を埋める答えは「だからあなたは好きなときに好きなことができる」という選択肢でした。会話文を解いていくには、ただ文法がわかるだけではできない場合があります。まず和訳ができること、そのために必要な単語の知識を今得ているところです。次に、相手の文化が想像できること。日本では日曜にお店が開いていない、ということは役所関係でない限りあまり見かけません。しかし、海外に行くとき日曜は礼拝の日としてやっていない都市は今でもあります。そのことを知っていることで、この問題は幾分か答えを選びやすくなります。

ただ勉強として、受験に必要なものとして英語を学ぶのではなく、生活の一部として自分自身が

街で出会うもののひとつひとつに英語を感じて親近感を得て行って欲しいと思います。日本という、他国の文化を上手に吸収できている国に住んでいるのですから、複合ビルに入ると案内所は Information、映画館は Theater など意識することなく英語を自分のもののできる場所は教室だけでなく、むしろ生活の中に広がっています。

まだ1年生ということで、すべてが点数に直結する英語ではなく、英語が学問だけでなく英語圏の方にとっての日常を表すものなのだとこのところから身につけて行って欲しいと思います。

(文責 下村麻紀子)

「数学」 中1・数の基本 中2・数の基本

担当 浅野直樹

中1・数の基本

中学生になって半年以上が経過し、学校生活にもすっかり慣れた頃かと思います。学習内容も小学生のときと比べると格段に多くなっていて、気を緩めるとついて行くのも大変なことでしょう。

数学では、中学生にふさわしく方程式の範囲に入りました。ご存知の方も多いでしょうが、小学生では方程式を使ってはいけないという建前があり、鶴亀算や旅人算というような、方程式を使わないがためにかえって複雑な計算法を用いるわけです。これらは全て一般化して方程式で解くことができるものです。そうした意味では中学数学のほうが小学校の算数よりも簡単でしょう。人生においても、大人になればなるほどある意味では生活が簡単になるのかもしれませんが。

それではなぜ小学校で方程式を教えないのかというと、おそらく正負の数や文字式の準備が必要だからでしょう。中学生でもそれまでにならうこれらの分野の理解があやふやだと方程式でもつまづくことは必至です。より正確に言うと、正負の数や文字式の理解というよりは、計算の慣れが必要となります。特に()の外し方や分数の処理はややこしく、完璧にできるようになるまでには相当練習しなければなりません。計算の際にはスペースを広く確保し、途中式を丁寧に書くことが大切です。小さいところで済まそうとしたり、省略したりするよりも、着実に進むほうが結局は早かったりするものです。

方程式の文章題は、設問文を読んで式を立てさえすればあとは単なる計算と同じです。日頃から本などで文章を読んでいるとこの部分が非常に楽です。問題があるとすれば単位の変換でしょう。特に時間は60進法なので注意が必要です。問われるのは普通、身近な単位ばかりなので自由自在に変換できるようになりたいところです。

中2・数の基本

スケジュールの調整などがうまくいき、秋学期の途中から新しく始めることになったクラスです。生徒本人は数学を苦手としていると事前に聞いていたので心配していたのですが、少し教えただけですぐにできるようになりました。

まず、三角形の合同や平行四辺形といった幾何の範囲に取り組みました。この分野では解答を読んでも図に翻訳して理解することが難しく、また理解できたとしても時間がかかるので人について教えてもらうのが早いです。特に必勝法があるわけでもないの、いろいろな問題を解いて勘を養うに限ります。そのときにすぐに解法を聞いても身につかず、あまりに自分の力だけでやろうとしても負担が大きくなってしまいます。適度に考えることを繰り返すと新しい問題でも方針の見当がつくようになります。理解できたら次は人に見てもらってわかるような証明を書くこととなります。

これが簡単なようで意外と難しいのです。どうすれば簡潔で美しい証明を書けるかを工夫することが、遠回りのようであっても、数学の力につながると思います。

もう一つの大きな範囲は二次関数でした。こちらでは幾何とはまた少し違った論理力が要求されます。教科書で習う順番に基礎から積み上げていくことももちろん重要ですが、グラフと式とを行き来しつつ理解を深めるとよいと思います。たとえば、二次関数と一次関数の交点の座標は連立方程式を解いて求めるのですが、これらのグラフは交わらないことがあります。また、連立方程式を解く過程で二次方程式が出てくるので、これが実数の範囲では解けないことがあります。実は、この両者は同じ事態を表しているのです。中学の範囲からは逸脱してしましますが、考えることのできない話ではありません。また、いろいろな条件から関数を確定させる問題では、未知数が2つで式が2つできれば基本的には解くことができるといったことを思いつけば、自信を持って進むことができるでしょう。

ここまで書いてきたような、数学的思考に親しみ、数学が得意で好きになってくれる日を楽しみにしております。

(文責 浅野直樹)

「数学」中3・数の基本 担当 福西亮馬

このクラスでは、それぞれの生徒に個々の課題を与えて、苦手なところあるいは得意なところについて、反復練習してもらっています。いきなり難しい問題をせずに、一つ思いつけばすぐに解けるような問題から先にします。そして一つの定理を使った問題のバリエーションを、何個もします。仮に「2辺夾角」相当を使って証明する問題を作るとすると、

「2辺が等しい(仮定) 間の角が等しいことを示す」

「1辺と1つの角が等しい(仮定) 他の1辺が等しいことを示す」

というバリエーションができますが、こうした微妙な(実は同じ定理を使う)練習問題を、円周角なら円周角、平行四辺形なら平行四辺形と、個々に味わいつくしてから、次にそれらの組み合わせ(それもまずは2つ、それでかなりのバリエーションになります)の問題をしていきます。いきなり最初から組み合わせの問題をすると難しすぎて、かえっていやになってしまいます。

「分からない問題」にすぐぶつかるのではなくて、まずは「分かる問題」を(多少のバリエーションをつけながら)解くことです。応用問題は一足飛びにできるものではなく、むしろこういう段階ができてはじめて、できるようになるものです。よく応用問題に手がでないからといって、「自分には応用力がない」と思っている人を見かけますが、その場合は、それ以前の基礎レベルを過去に何回繰り返そうとしたか、その意欲を自分に疑ってみる必要があります。基本問題をすることは一見、簡単なことのようにですが、その繰り返しを何度するかを自分に課すことは本当は厳しいことのはずなのです。

また、簡単な問題から段階を経ていくと、だんだんと難しくなる問題に対しても、「多分今まで通り解けるんじゃないだろうか」という気で挑めるようになってきます。中学・高校のあいだは、そうした応用問題に進むまでの段階として、基本問題としっかり触れ合う時期であってもいいのではないかと私は考えます。もちろん、今しているそれがすべてではないと認識し、その先にあるものに興味を持ち続けることができていることが前提ですが。むしろ私は、個々にとって不適切な難易度の問題を解かされるうちに、かえってその先への興味が失われてしまうことを恐れます。

(文責 福西亮馬)

「数学」 高校・数の世界 担当 福西亮馬

このクラスでは、高校3年生の生徒1人と微分積分に取り組んでいます。今学期は「無限級数の極限」と「回転体の体積」をしました。

回転体の体積では、たとえばこんな問題がありました。「半球状の容器を水がすりきれ満たしている。容器を 30° 傾けると、容器の水はもとの何分の何になるか」これは小学生でもイメージできそうな問題です。答は半分ではないのは予想できるでしょうか。とすれば、こぼれた水とこぼれなかった水とは、何：何なのでしょう。その答は、じつにきれいな数字で出てきます。それを積分を使って求められた時、おのずと生徒の口からも「なるほど面白いですね」という声が聞かれました。問題集にある問題なので、つい面白さを感じる暇もありませんが、やはり数学とはこういうものなのだなと感じました。

またある時間は高校範囲を脱線して「線形代数」をすることもあります。本人の高校で大学の講義に出る取り組みがあるそうで、その補足説明にあたっています。本当は先取りというのは好奇心との兼ね合いで難しいのですが、せっかくなので、線形代数が今している微分積分と合わさるところにイメージを運びながら学んでほしいと思います。

たとえば関数をベクトルのように思うことで、直交や面積というイメージを得ることができます。その逆に、微分の話を経験して、行列の微分というものも考えることができます。

またベクトル同士の間で考えていた内積を拡張して、関数同士の間でも内積を取ることができます（これは無限次元の話なので条件がいります）。それを定義するものとして「積分」が登場します（関数の内積は、二つの関数の各成分ごとの積の総和です）。内積は線形代数で、積分は解析でそれぞれ別にして習う概念ですが、実は密接なつながりがあります。

さらに量子力学においては、シュレーディンガー方程式という関数の話と、ハイゼンベルクのマトリクス力学という行列の話という、二つの数学的背景があります。実はその二つともが同じ問題を扱い、（固有値問題として）同じ答を出しているという興味深い事実があります。かたや無限で、かたや有限の数学！ そのあたりを本来なら熱く語りたいたところですが、「お楽しみはこれからだ」ということにしておこうと思います。ただ、今の高校生たちに向かって、目の前でしていることが少なくとも「意味のない」ことではなく、また「これで終わり」でもないということだけ、伝えられたらと思っています。

（文責 福西亮馬）

高校生・一般の部

「ラテン語入門」「ラテン語初級講読」 担当 前川 ^{ゆたか}裕

ラテン語入門

秋学期は3名のご参加により、初級文法を学びました。1回につき4課という分量はややきつさを感じることもありますが、しかしこの短期に集中して行うことによって文法全体の把握も促されることとなります。毎回の講義は、その課のポイントを簡単に説明し、練習問題の回答を行うという形式です。そのときに出てくるいろいろな質問・疑問についても一緒に考えながら、講義を進めています。そのため、毎回10分程度伸びてしまうことは、私の時間配分の問題ですが、申し訳ありません。初級文法を一通り終えたと、原文に触れることが可能になります。続けて、講読へ参加されることを期待します。

(文責 前川 裕)

ラテン語・初級講読

今期は、参加者の希望によりルクレティウスの *De rerum natura* 「事物の本質について」を読みました。詩文は散文と違って独特のルールがありますので、慣れるまでが大変ではありますが、ラテン語の簡潔さを味わうことができる格好の材料ではあります。1回につき10~15行くらいが適当な分量のようです。一学期で150行程度を読むこととなります。

次期のテキストは未定ですが、ルクレティウスを継続して読むことも考えています。

(文責 前川 裕)

「ラテン語中級講読」 A・B 担当 山下太郎

「中級講読」のクラスでは、キケローの『友情について』とウェルギリウスの『農耕詩』を読んでいます。『友情について』は岩波文庫にも入っているポピュラーな作品で、翻訳もすばらしいのでご一読をお奨めします。一方、『農耕詩』は京都大学学術出版会から翻訳が出ています。日本では知名度が低いようですが、ヨーロッパでは「最高の詩人による最高の作品」(ドライデン)と評価されています。今これらの作品をじっくり読み直す機会を得て感じることは、どちらもある程度年齢を重ねてこそ味わえる作品だということです。ラテン語を学ぶ上で、文法や語彙の知識は不可欠ですが、これらの知識はラテン語を「読む」ための道具に過ぎません。「大人」の学習者には「年齢」(経験)という武器があり、ウェルギリウスやキケローの読解にこれを生かさない手はありません。今講読のクラスに参加されている方は、みな「山の学校」で初級文法を終えた方ばかりですが、読解を通じて文法と語彙の力を伸ばす一方、それぞれの立場で培ってこられた人生観を作家のそれと照らし合わせることにより、深く原文を読み解く楽しさを経験していただいています。

(文責 山下太郎)

ラテン語こぼればなし 文ノ山下太郎

英単語の語源 美術・絵画編

「美」の文字は、元来「大きくて立派な羊」を意味した。そこから「うまい、うつくしい」の意味を表すようになった。「美酒」というのは、「うまい酒」のことである。

「美」は英語で beauty というが、ルーツはラテン語の bellus (美しい) に遡る。ラテン語で「善」を意味する bonum (ボナム) は bellus (ベッルス) と語源的に関連している。「美しいもの」は「善いもの」であり、「善いもの」は同時に「美しい」という考え方、また、ここに「真」という言葉を加え、「真・善・美」の理想のあり方を追求したのが古代ギリシア人であった。

bonum (善) の形容詞 bonus (善い) は英語でボーナスと発音するが、日本人にとっては「賞与」という意味でおなじみの語である。一方、bellus (美しい) の名詞形は理論的には bellum となるが、これは「美」ではなく「戦争」を意味する。つまり bellus の名詞形はない。「美」を意味する名詞としては、別語源の decor (デコル) や venustas (ウェヌスタース) が用いられる。

ローマの建築家ウィトルウィウスは、建築の三要素として utilitas (用)、firmitas (強)、venustas (美) を挙げたが、彼は、機能、構造、美しさの三つの要素が優れた建築を作り上げる条件と考えたのである。ちなみに venustas は、「美の女神」ウェヌス (英語読みではビーナス) に由来する単語である。

「絵画」は「美」を表現する芸術の様式とみなしうるが、ラスコーやアルタミラの洞窟絵画の例をひくまでもなく、人類は文字の発明以前から絵を描いてきた。「絵画」に相当する英語の「ピクチャー (picture)」は、ラテン語の pictura (ピクトウーラ) 「彩色する」という動詞 pingo (ピンゴ) から作られた名詞形に由来する。

「絵画」といえば、『万葉集』巻二〇に次のような歌がある。

わが妻も画にかきとらむ暇もが、旅ゆく我は見つづ偲はむ

この歌に出てくる「画」は、英語の picture に該当するのだろうか。現代であれば、「旅ゆくあれ我」は「絵」ではなく「写真」を携えていくところかもしれない。この歌が示唆するように、「絵」にせよ「写真」にせよ、「偲ぶ」相手をいつでもどこでも「イメージ (image)」として呼び起こす力を持っている。

image の語源はラテン語の imago (イマーゴ) である。「実物に似た姿、面影」という意味を持っており、「模倣する」という意味のラテン語 imitor (イミトル) とつながりを持っている。

「実物に似た姿」(imago) を心の中に生み出すこと つまり「心に描くこと」を英語では imagine (イマジニ = 想像する) という。その名詞形が imagination (想像力) である。

ゴーギャン (1848-1903) は、「見るためには目をつむる」(I shut my eyes in order to see.) という言葉を残した。描く対象をよく見るには、心の目で見なければならぬ すなわち「想像力」(imagination) を生き生きと発揮させねばならない という逆説である。

この世に存在する事物は、それだけで美しいのではなく、画家や詩人の想像力の発揮をもって、初めて美しいものと感じられる。このことについて、モームは『人間の絆』(Of Human Bondage) の中で、主人公に次のように語らせている。

「僕が初めてパリへ行ったとき、確かクラトンだったと思うが、美とは、画家や詩人を待って初めて、物の中に生まれるのだというような趣旨のことで、長広舌を揮ったのを思い出すよ。美を創造するのは、画家や詩人なんだ。その物自体じゃ、ジョットの鐘楼も、工場の煙突も、区別はない。

結局、美しいものというのは、それが次々と後の時代までも、人の心に起こす深い感動によって、だんだんと豊かになるんだって。古いものが、新しいものよりも美しいということになる。

たとえば、あの『ギリシア古瓶賦』だ。あれは、書かれたときよりも、今の方がよっぽど美しいのだ。というのは、この百年間に、多くの恋人達があれを読み、また、心に悩みを持った人たちが、絶えずあの詩に慰めを見出しているからなんだ。」(64章)

ここでモームは、キーツの『ギリシア古瓶賦』を「古典」として取り上げ、美の創造と伝統の継承の問題を取り扱っている。すなわち、美を創造するのも人間なら、それを感動によって共有し、次の時代に伝えていくのも人間であり、古いもの、つまり古典は後世の「鑑賞」「解釈」といってもよい。によって、日々豊かになり、美しくなっていく、と。

「伝統」にあたる英語の tradition にせよ、「解釈」にあたる英語の interpretation にせよ、共に語源はラテン語であって、前者は「手渡されたもの」、後者は「二者の仲介を務める」という意味をもっている。つまり、「伝統」とは過去から現在に「手渡された」人類の宝であり、「より豊かなもの」として未来に継承されるべきもののことである。現代人による「解釈」とは、いわば「過去と未来の仲介を務める」行為にほかならない。

ところで、このような「美の創造と伝統の継承」という問題は、モームのふれた『ギリシア古瓶賦』における主題と一致しているように思われる。

キーツはこの詩の中で「心の耳で聞く調べの美しさ」にふれて次のように歌っている。

Heard melodies are sweet, but those unheard

Are sweeter.

耳に聞こえる調べは美しい。

だが、耳に聞こえない調べはもっと美しい。

人間は、「今」聞こえてくる音色だけに美を感じるのではない。「耳に聞こえない調べ」とは遠い昔に歌われた音色、すなわち「古典」を意味するだろう。絵画にせよ音楽にせよ、古典と呼ばれる作品に普遍的な美を見出し、それを鑑賞するためには、なによりも心の目と耳を大きく開く必要がある。

なお、この作品は次のように締めくくられている。

'Beauty is truth, truth beauty,' that is all

Ye know on earth, and all ye need to know.

「美は真であり、真は美である」これは

地上にて汝らの知る一切であり、知るべきすべてである。

初めに触れたように、「真、善、美」の理想の在り方を追求したのがギリシア精神であり、この伝統を「今」に蘇らせようとしたのが、古くはローマ人であった。その後ルネサンス時代を経ながらも、この伝統解釈の歴史は、ヨーロッパ諸国の中で連綿と美の伝統を形成してきたのである。

モームが示唆したように、古典は、個々の作品がいかに優れたものであったとしても、後世の解釈を欠いては、けっして現代に伝わることはなかった。逆にいえば、はるか二千年以上昔の作品に「今」接することの出来る意味を、我々は一度かみしめる必要があると思われる。

(文責 山下太郎)

第11回 ラテン語のゆうべ



「ラテン語と文化」 ラテン語の広がり (無料)

11月28日(水) 午後8時10分~9時30分

講師 前川 裕

場所 山の学校(北白川幼稚園内)

対象 ラテン語に関心のある方

講師からのメッセージ

今から二千年前の古代ローマ時代の言葉「ラテン語」は、現代にもいろいろな形で受け継がれています。現代に生きているラテン語を見ていながら、ラテン語を始めるための一歩をお手伝いします。